

やまがのきんざんあと ながのきんざんあと
山ヶ野金山跡及び永野金山跡

県文化財保護審議会委員 林 匡

1 はじめに一山ヶ野金山・永野（長野）金山の環境など

鹿児島県の鉱産資源の中で、金については、江戸時代に発見された金山からの産出が相当あり、全国的に見ても有数の産出量を誇った金山が複数あり、現在も菱刈金山が日本を代表する金鉱山として稼働している。

山ヶ野金山・永野（明治初期まで長野とも記す。以下永野で表記する。）金山は、北薩火山群の一つである国見岳（現・湧水町）の南西麓に位置しており、大隅国山ヶ野（現在・霧島市横川町上ノ）、薩摩国永野（現・さつま町永野）にまたがる近世から近現代の鹿児島県域を代表的する金山である。河川には西流する穴川（支流は十三谷川・九郎太郎川・平八重川。川内川に合流）と、東流する天降川の二つの水系がある。

地質は、下位から鮮新世（約 530 万年前～180 万年前）の金山安山岩を基盤岩とする。鮮新世から更新世（約 180 万年前～1 万年前）の火山岩類や湖沼性の堆積物である永野層、永野新期安山岩類からなり、各層は不整合関係にある。第四系は加久藤火砕流堆積物や入戸火砕流堆積物からなり、河川沿いの低地に分布する。その中で、金山安山岩及び永野層が、山ヶ野鉱床含金石英脈の母岩となる熱水鉱床型の鉱脈である。

寛永 17（1640）年に金脈が発見され、同 19 年の幕府による採掘許可後、横川郷、永野郷、栗野郷（現・湧水町）にわたる周囲約 3 里（約 12 km）を金山区域として柵をめぐらし操業を始めた。

2 沿革（1） 江戸時代

開山に関する史料として「旧記雑録」所収の文書から、寛永 10 年代に下流域での砂金発見が基となり、宮之城に私領を有する島津久通（後に家老）が金山の発見に取り組んだこと、その後、内山予右衛門を招いて金山を探索させたものの、発見につながらなかった。そこで久通家臣らが肥後の山師、笠伊兵衛尉（半屋為右衛門）に依頼して、再度の調査により、寛永 17（1640）年 3 月に金脈が発見されたこと、砂金とともに、既にこの段階で灰吹法による「吹金」が 2 代藩主光久に御披露目されたことが指摘されている。金山開発体制が整備され、島津光久は、同年に平佐私領主の北郷久加（後に家老）を金山惣奉行とした（奉行所は永野に置かれた）。以後寛永 18 年にかけて幕府老中への働きかけがなされ、幕府へ砂金も献上されている。寛永 19 年 1 月には、一年間限定で採掘許可がおきる。寛永 20 年以後、採掘が中止され、他国者の金山労働者は追放され、境を立てて人々の出入りを禁じるように指令された。

この後、藩から幕府への働きかけがなされ、明暦 2（1656）年 6 月に再び採掘許可を受けて再開される。再開後の金山は、山ヶ野が中心であり、奉行所は山ヶ野と永野に置かれていたが、山ヶ野は鹿児島への順路にも当たり、永野奉行所を廃止した（幕府に対して開山の経緯から永野金山と称したという）。当初は、鉱脈付近の地表部を掘る露天掘り作業だったが、再開後は坑道で金鉱石を追う作業が多くなったとされる。江戸時代の坑道は、よい鉱石をたどり掘られたため、坑道は上下左右に曲がって進み、枝分かれした。鉱脈の幅に応じて坑道の幅も様々となる。厳しい肉体労働に加え、粉塵に

よる珪肺、落盤事故などの危険もあった。再開当時の間歩（坑道）は 158、人数は 4,607 人である。再開直後 14 貫余の産金量は増え、最盛期の万治 2（1659）年には産金量 498 貫余となる。町数も 35 ほど、家数 1,500 軒、人数 12,000 人という景況を示したという。五大稼業地として、鯛谷千軒、高木千軒、夢想谷千軒、江戸ヶ谷千軒、湊町千軒が成立したという。鉱山技術者である山師たちが探鉱から製錬まで請け負い、採金量に応じて一定の運上を藩に納める「請山（自稼請負）」という形態であった。藩は金山奉行所を設け、その下に諸役を置き、金山地区内の監督・取締を行った。産出された金は幕府への上納は勿論、逼迫した藩財政にとり重要な財源となった（『鹿児島県史』『金山万留』等）。また、川筋直しや灌漑事業にも用い新田開発にも充てられたという（「山ヶ野金山御取建之由緒」）。

金山開発には、開山当初以来、他領出身者も多数関わった。これまでの調査等では、大阪など関西出身者や、九州各地の出身者などが指摘されている。霧島市教育委員会による山ヶ野金山の墓塔調査報告では、江戸時代の墓塔は 55 基あり、被葬者の出身地が判明するものでは、豊後、筑前、石見、大坂、江戸や安芸、肥前佐賀のものが確認されている。

また、金山は、金山関係者の日用必要物資の供給はもとより、歓楽街として金山内外の金の集まる遊郭（田町）などを含む一大消費地でもあった。寛文年間（1661～73）頃に始まったとされる田町遊郭は、藤本箕山『色道大観』にも、遊郭内の建物と道路配置図とともに記載がある。8 軒の妓楼には「大阪屋」「木津屋」「小倉屋」「土佐屋」などの屋号が確認でき、妓楼主の出身地に因むと考えられている。

金山町人に関しては、例えば「島津家歴代制度卷之三十一」（『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集二』）には、享和 3（1803）年 3 月の御記録方添役相良太郎太書出（自身が山ヶ野金山において由緒調査を行ったもの）には「住吉屋 奥村正右衛門、鯛屋 早淵七左衛門、京屋 吉田五郎左衛門」についての来歴調査がまとめられている。

開山等に関わる史料は、当時のものではなく編纂史料が中心であり、地方文書など一次史料がなかなか見つかっていない。藩記録所保管文書等も多くは伝わらないが、東京大学史料編纂所蔵「島津家文書」（島津家文書、島津家本）や鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵史料中には、ある程度関係の記録等があり、近代化に関しては、株式会社島津興業（尚古集成館）により報告などがなされている。また、山ヶ野・永野金山跡には無数の坑口が残されている。ただし、近代の基幹坑を除いて、多くの坑道については開削の年代も不明で、坑道の分布調査等も現段階でなされていない。

江戸時代の出土遺物は、鉱山臼の他に、生活用の各種陶磁器、古銭、煙管や天秤はかりがある。このうち、金鉱石を粉砕した石臼は全国の金山に多く残されており、山ヶ野金山跡にも廃棄又は未完成の石臼が見られ、時に個人宅の石垣や門柱、庭石や護岸用などに転用されて残されており、これらについては鹿児島大学法文学部比較考古学教室新田英治教授による、山ヶ野金山奉行所跡に隣接する寄勝場（金鉱石粉砕、金を取り出す作業場）での調査分析によって考古学的検討がなされ、「山ヶ野型」と呼べる特徴が指摘されている。

金山の作業工程は、採鉱（露天掘りや坑道掘りで金鉱石を採掘する）、選鉱（品位の高い部分を選り分ける）、山分け（金鉱石を金山奉行と請負業者で分ける）、粉成（鉱石の粉砕から金粒の採取を行う）、比重選鉱（金の比重の重さを利用し、水中に入れて金を他の鉱物や土と分ける）、吹き立て・吹き分け（熱と化学反応による製錬）、焼金・塩焼（純金にする）である。山ヶ野金山については、これらの工程全てではないが、主な部分は、文化 12（1815）年に編纂された地誌『薩藩勝景百図』や、天保 14（1843）年に編纂された地誌『三国名勝図絵』に記載されている金山での作業が絵解きされている。

鉦脈露頭部を掘った土砂混じりの鉦石を、鉦石とズリ（鉦石ではない廃石）とに分離する。手割により細かく砕かれた鉦石は、唐臼（踏み臼・搗臼）で砂状になるまで粉碎される。さらにこれを上臼と下臼からなる碾臼により水を加えながら泥状にし、水を張った木製の槽に入れて、揺鉢や揺板を用い夾雑物と選り分けられる。この選鉦作業は「せり（砕）」と言ひ、作業場を砕場せりばという。作業に必要な水は、川から水路が引かれることが多いが、川が利用できない場所では溜め池を造り、湧水や雨水を確保して利用した。（搗鉦作業に水車が本格的に導入されるのは明治期以降とされる。山ヶ野金山では、明治29（1896）年に台数463という。）すり潰され、夾雑物が除去された鉦砂は、床屋（前銷屋きんせう）において灰吹法により金に精製される。この後、金山奉行のもとで、金の量目と品位が確認された。

掘り出された鉦石や岩石を運ぶのは、人力によった（ダツテゴと呼ばれる背負い籠が用いられた）。明治初期の永野金山の写真では、一輪車も使用されている。明治期の近代化で、トロッコ（鉦車）が使われるようになる。（明治初期の製煉所全景の写真にも手押しトロッコが見える。）その後、主要坑道や坑外の運搬には、馬車から坑道に電線を引き込んだ電車によるようになる。明治末・大正初期の胡麻目坑口の写真には、坑内架線による電車が鉦車を引いている状況が確認できる。なお、採掘に当たって最も問題になったのが地中の坑道から湧き出す水の汲み出しであったという。

その後、全国的にも産金量は減少した。佐渡金山でも、宝暦年間（1751～64）から文政年間（1818～30）における衰退と技術整備がなされたが、同時期の山ヶ野金山については「当時一応金山の名に価するものは薩摩の山ヶ野金山だけであつたらう」（『明治前日本鉦業技術発達史』）とされた。しかし、山ヶ野金山でも寛文年間（1661～73）に100～300貫で推移していたものが、「要用集」では元禄期を過ぎた正徳年間（1711～16）には産出減を記し、延享4（1747）年から少しずつ出金増加に転じ、明和元（1764）年7月から翌年6月までの出金が13貫43匁余となったものの、天保（1830～44）から嘉永年間（1848～54）には4貫余となる。

3 沿革（2） 幕末から明治時代

「薩藩例規雑集」巻二十（『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集六』）に収められている「山鹿野鉦山出産高」には、追記として万延元（1860）年、明治3（1871）年、明治15（1882）年の山ヶ野・永野鉦山産額がやや増加したことを示している。「中二年歴ノ内高額ノ産出ノミヲ抜抄ス、安政元年ト明治十五年ヲ以テ最高度トス、実ニ海内無比ノ鉦山ナリ」として、11代藩主島津斉彬の治世（嘉永4年～安政5年）である嘉永・安政年間（1854～60）について「嘉永・安政ノ頃ハ斉彬公深ク御手ヲ付ラレ、尋テ明治ノ頃ハ西洋ヨリ機械ヲ取寄テ外国人ヲ雇ヒ、盛大ナル仕掛ナルカ故ニ如此ノ産額ニ上レリ、嘉永・安政ノ間ハ別ニ機械ノ設モナク、聊カ破裂法ヲ開カレタルマテナレトモ、斉彬公分テ御手ヲ付ケラレ、人気盛ニシテ産額ノ増シタリト云フヘキナリ」と記している。ただし、実際の経営状態は産金のみでは利潤を生み出しがたく、藩の表方会計からの経営費をもって運営されていた。斉彬の時代には、「破裂法」即ち爆薬使用が試みられ、開削の効率化が図られ、積極的に労力を投下して鉦山振興が企図された（明治10年代になりダイナマイトが使われるようになったという）。

幕末の薩摩藩は、山ヶ野金山の近代化に着手した。慶応3（1867）年には、西欧の鉦山技術を導入するためにフランス人技師コワニエ（Coinet）を招聘したが、直後に明治維新を迎え、コワニエは明治新政府のお雇い技師として、生野銀山（兵庫県）へ赴任した。

明治維新後、山ヶ野金山の経営は、薩摩藩から島津家へと移る（廃藩後、島津家は、山ヶ野金山は藩主手許金で開発したので個人資産であると主張し、明治政府もこれを認めた）。島津家は、コワニ

エの間接的な指示を受け、鉱山機械を輸入し、山ヶ野には蒸気搗鉱機（鉱石を粉砕する機械）を、永野に水車搗鉱機を導入した製煉所を設置し、さらにアマルガムを用いた搗鉱混汞法を導入して金の回収率向上を図った。

しかし、間接的指導には限界があり、島津家は明治 11（1878）年にコワニエから紹介を受けたオジエ（Ozier）を雇い入れ、鉱山技術の近代化を図った。（オジエは前年来口、西南戦争のため鹿児島に向かうことができなかった。島津家は同年に鉱業館を設置し、初代館長に島津家の家扶の新納時を任命、当時の鹿児島県の年間予算に匹敵する 20 万円を投じて堅坑道掘削、製錬法改良、鉱脈の測量や（山ヶ野から加治木に至る）馬車道の新設などを行った。しかし産金量は伸びず、経費は計画を大きく上回った。オジエは、契約を延期して明治 13（1880）年まで山ヶ野に滞在し、指導を継続したものの、産金量は低迷を続けた。

この時期の島津家関連史料では、例えば鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵玉里島津家史料中には、明治 14（1881）年の第二回内国勸業博覧会における「東京府華族 島津忠義代理 鹿児島県士族 新納時」による「第二回内国勸業博覧会出品目録」があり、記載内容には産地「大隅国桑原郡山ヶ野金山」や「薩摩国日置郡芹ヶ野金山」「全（薩摩）国谿山郡谷山錫山」がみえ、物名に「天然金」「砂金」「礦石」等と記し、それぞれ「壺箱」「壺壘」「壺塊」とその尺量を記している。また「山ヶ野鑛山區内実測平面圖」「全地下坑業実測圖」もみえる。鉱山内の実測がこの間になされたことも確認できる。また明治 13（1880）年から同 15（1882）年にかけての「山ヶ野金山状況報告」「山ヶ野金山会計報告」「山ヶ野金山関係書類」は、罫線のある紙で帯留められ、帯書きには「一月表 四葉、一景況報文 十冊、玉里御邸江御届ノ分」とある。

明治 13 年 11 月 5 日付「鑛業館長新納時」による「玉里御邸 伊集院九郎殿」宛書状には

『鑛業館印』（朱割印）『乙第八号』（朱書） 長野分局

右者該地方開坑採礦及製鑛倉庫等は迄分局ニ於テ所轄イタシ来候処、豈科ヤ分局ノ名称ヨリシテ稍モスレバ隔絶ノ意味相生シ、随而事業山ヶ野ニ劣リ、並立ノ進歩ニ至リ兼十歩百歩ノ差異有之、充分ノ精業ニ不至、倒底維持スルノ目途無覚束処ヨリ不得止、得テ評議ニ涉リ従前ノ分局相廢シ、更ニ出張所ト相定、右江関係ノ各課各一名宛繰迫ヲ以相詰事務所扱候様決定イタシ候付、此段上申候也、

十三年 鑛業館長

十一月五日 新納時（朱印）

玉里御邸

伊集院九郎殿

とある。ここには、山ヶ野に対する永野分局（出張所）を同等としようとする現場の働きかけが確認できる。

明治 15 年 7 月 24 日付「山ヶ野鑛業館」から「鹿児島出張 折田信夫殿」宛書状は

『乙第四号』

一景況報文 第廿六號 一冊

一出納月表 六月分 三葉

右之通調整御送附申上候間、磯・玉里御両邸江呈上例之通り御取計可給者也、

山ヶ野

十五年七月廿四日 鑛業館 「鑛業館印」（朱印）

鹿児島出張

折田信夫殿

とあり、この時期、金山鉱業館からの定期的な報告が島津家と玉里島津家になされていたことも確認できる。

これら明治13年から15年にかけての山ヶ野鉱山景況報告には、管轄する坑道や採鉱状況の報告がなされている。例えば、明治15年4月26日付「館長不在代理伊地知弥平太（朱印）」による「山ヶ野鑛山景況報文第貳拾三号」には、「高塚坑」「千石坑」「全風道」「碾山北抜」「西濱坑」「第二坑」「全風道」「晒立坑道」「久楽坑」「胡麻目坑」「全風道」「全硯抜切」「全風道」と各坑道名が確認できる。

この他、この報告には「晒豎坑ハ当月初ヨリノ降雨ニテ水溜り上り、目下業ヲ操ル能ハズ」とあり、湧水の他に降雨による排水問題を記す。また「淘盤ハ盤数少ク且ツ鑛石含有ノ硫化鉄ハ少ク、因テ汰鑛量上ラズ、去ル十日方迄ニ漸クートン余ノ所得アリシヲ以テ此業ヲ改良センコトヲ議シ変更ヲ行セシガ、昨今ノ処ニテハ改良ノ効アリ、日々ノ汰鑛量「トン」ノ壺合五勺位ヲ得ル、但從前ハ昼夜業事ヲナセシモ其詮ナク、幾ント四カ月ヲ閲シテ斯ノ如キ結果ナルヲ以テ苦慮セシモ、目下昼間ノミノ業ニシテ其所得十倍セリ、尚ホ改良スルコトアラバ倍ス所得ノ多キヲ見ルニ到ラン」との苦しい操業状態を記す。さらに「焼鑛爐製煉器ノ一部全ク準備セシモ、製鍊ニ必要ノ過酸化満俺昨季夏「オジェー氏ニ托シテ注文アリシモ未達セズ、因テ去月大坂へ四五トン」ノ硫化鉄ヲ製鍊シ得ル丈ケノ量ヲ注セシモ未ダ達セズ、故ニ試シヨモ成シ得ザルナリ」とあり、これについては同年6月13日付の第二十五号の景況報告に「塩化法試験ヲナサント客月十九日夜ヨリ焼鑛ニ着手シ、同廿九日迄ニ硫化鉄幾ンド四「トン」ヲ焼キ上ゲタリ、爐ノ構設申分ナキガ如シ、最初一ト釜ハ多クノ時間ヲ費セシモ、後トニハ一昼夜ニ半トヲ焼キ上ケルヲ得タルガ如シ、而シテ塩化法ニ取掛ラントセシニ今度大坂ヨリ到着セシ過酸化マンガン品位良カラズ、寸功ヲ奏セズ、其結果ノ如何ヲ実檢セント久シク待チ居タル希望モ画餅ニ属シ、遺憾極マレリ、コヽニ於テ電報ヲ以テ在京新納館長ニ右ノ良品ヲ送致アランコトヲ乞フニ至レリ」「長野淘盤建設ハ落成ニ至リシモ、未ダ具合ヨカラザル所アリ、今其手直シ方ニテ不日試ミ回轉ヲナサントス」とあるように、黄鉄鉱を除くための比重選鉱の淘盤や塩化焼鉱炉の試みも確認できる。この他、同年5月10日付の第二十四号の景況報告には「金山橋架設ハ再度マデ難ニ遭ヒシモ、辛フシテ去ル五口ニ落成シ、其堅牢ナルハ疑ヒヲ容レザルナリ、コヽニ於テ全道■皆竣工ニ至リ、車運ニ險悪ヲ訴ヘズ人馬ノ歩行ニ容易ニシテ其便勝テ云フベカラズ」と金山橋に関する記述もある。

しかし、経営状況の厳しさから、明治16（1883）年に島津家は金山の近代化事業を断念した。この近代化事業中断により、山ヶ野金山は鉱業館直営と自稼請負制（鉱業感館と契約した坑夫らによる個人運営）の二本立ての経営方式が採られるようになる。明治33（1900）年、新納に代わり鉱業館長に就任した蒲生仙がこの自稼請負制を奨励したため、自稼人が増加した。産金量は伸びたが、自稼人らによる無計画な採掘が行われた（自稼請負制は大正14（1925）年まで続く）。

この自稼請負制は、近代的鉱山経営の課題とされた（明治37（1904）年の京都帝国大学教授横堀治三郎氏の講演録、『日本鑛業會誌』20巻238号）。島津家は直営部門の体制強化を図り、明治37年に工学博士の五代龍作を第3代鉱業館長に任命し、82万円の予算を計上して、再度の大規模な近代化に着手した。その主なものは、胡麻目大通洞の切り上げと掘進、晒・三番滝の両豎坑開削、水天淵（現・霧島市隼人町、天降川上流）での水力発電所の建設、永野三番滝の製煉所の新設と電化であった。電車による鉱石運搬などの全施設の電化、製煉所の近代化が行われた。また、青化製鍊（シアン化法）もこの頃に始められ、山ヶ野の一本杉に青化製鍊所が建設された。明治40（1907）年、水天淵

発電所が完成し、動力は全て電気に切り替えられ、金山の各作業所や坑内の主要部にも電気が点って作業能率が向上した。このため産金・産銀量は大幅に増加した（明治 33 年に金約 165g・銀約 122g から、明治 44 年には金約 380g・銀約 825g。銀の産出量は 6 倍以上に増加）。主要坑同士を繋ぐ堅坑の開削も行われ、この完成によって、鉱石は坑内運搬によって永野の胡麻目坑まで運搬されるようになる。

明治 41（1908）年、三番滝製煉所が完成し操業を開始する。山ヶ野搗鉱所で処理していた火入坑などの鉱石も、坑内運搬によってこの製錬所に搬送・処理されるようになった。永野に新鉱業館が落成し、経営主体は永野金山に移された。明治 45（1912）年、鉱業館長に西郷菊次郎が就任する。伝えられる業績には、大正 3（1914）年に鉱石運搬道の九郎太郎橋、平八重橋の木橋を鉄橋に架け替え鉱石運搬の電化を促進したこと、金山倶楽部（現在は門柱のみ）等を建てたこと、自費で夜学校を開き青少年の訓導に努めたことなどがある。大正 5（1916）年には、山ヶ野搗鉱所・一本杉青化製錬所の操業が停止され、鉱石の製錬は永野三番滝製煉所で行われる。大正 15（1926）年には山ヶ野搗鉱所大煙突も爆破解体された。

4 沿革（3） 大正・昭和期—経営の近代化と戦後—

大正 11（1922）年には経営の近代化が図られた。薩摩興業株式会社（現・株式会社島津興業）が設立され、鉱業館は、薩摩興業株式会社の山ヶ野鉱業所に組織替えになる。事業経営は同社に移管された。鉱山経営は高い収益を上げ、その余剰を基にして薩摩興業株式会社は山林事業に乗り出している。大正 14（1925）年には自稼請負制が廃止され、自稼人らも鉱業所所員として働くこととなった。その後、同 15 年 2 月に三番滝製錬所の火災で大きな被害を受けたが再建され、最新式の鉱磨式製錬方法が導入された。ここでは、胡麻目坑から搬出された鉱車を反転して落とした鉱石を、大割小割の碎石機でバラス状にして、ベルトコンベアで貯鉱所へ運び、大型のボールミルで泥状にして、泥水と水銀を塗った亜鉛板に流し、金を水銀に付着させて採金し分析所で金塊にした。この三番滝製錬所には、他に鍛冶屋、鋳物工場、木工場、製材所、分析所、変電所、化成工場などがあった。

以後、山ヶ野鉱業所は、1000 名に近い従業員を抱える県内有数の事業所となる。

昭和 8（1933）年から、年産 3 万 t 前後だった出鉱量が増加し始め、昭和 14（1939）年に 10 万 t を突破し、金実収量は昭和 6（1931）年に 210 kg を記録（前後は 160 kg 前後）し、昭和 10～12（1935～37）年には年 300 kg を超えるまでになった。当時の軍備増強のために、海外技術・資源調達が不可欠となり、決済手段として金増産の需要が高まっていた。

山ヶ野金山は、鉱床の上部にとじ（礫）金（粗粒金）を含む高品位鉱石を産出したという。とじ金の産出状態を『三国名勝図絵』は「角石の中に甘柿の細文點の如く」と表現しているが、江戸時代の鉱石品位は正確には分からない。昭和 6（1931）年頃には、胡麻目坑で次々と有望な鉱脈が発見され、鉱石中に肉眼で確認できるこのとじ金が多く産出されたが、このため同年に鉱山従業員の大多数が関わった盗掘密売事件が起こっている。当時の鉱業所長伊地知清彦の奔走で事件のもみ消しが図られ、また盗難金の分割返済、仕事上がりの入浴中に所持品検査を行うなどの対策も講じられる。その後は、従業員の退職や召集のため、労働力確保が不安定になったという。なお、このとじ金については、昭和 61（1986）年には、明治 30～40 年代と昭和 30 年代に山ヶ野鉱床から採取された鉱石標本が磯庭園土蔵から再発見されている。

昭和 16（1941）年 12 月の太平洋戦争開始となり、対外輸入品が途絶え、国際決済手段としての金の増産は不要となる。昭和 18（1943）年のいわゆる鉱山整備令（商工省「金鉱山に対する補償基準お

よび設備・資材転用実施の要旨)により、「戦時の不急(不要)産業」としての指定を受け、山ヶ野金山は操業を停止した(排水などの保安要員を残す)。技術者・労働者は軍需遺品生産に重要な京都府大江山ニッケル鉱等に移され、製錬設備は金を除く重要鉱物の開発・増産を目的に設立された国策会社の帝国鉱業開発(株)に譲渡され、他山へ転用された。施設・資材は根こそぎ他山に転用された。

薩摩鉱業株式会社は麻生鉱業と協力して再建に着手する。昭和25(1950)年、山ヶ野鉱山(株)が設立され、基幹坑道再生や鉱山機械(鑿岩機など)導入、製錬設備復旧により同年7月に操業開始に至る。しかしこの再建は失敗し累積債務が増大して、昭和28(1953)年、山ヶ野鉱山(株)は解散し、山ヶ野金山はその幕を下ろす。薩摩興業株式会社は、昭和26(1951)年に社名を株式会社島津興業に変更している。同社ではその後も鉱山再開への試みがなされている。昭和32~40(1957~65)年には、東南部の鉱床開発を目的に千日坑が取り開けられ、その後西部鉱床へと採鉱を拡大したが、成果が得られず休止となる。昭和43(1968)年には三井串木野鉱山(株)から租鉱権(他者の鉱区を採掘する権利)設定の申出があり、北部鉱区を中心に採鉱が進められた。しかし有望鉱脈を補足できず、昭和46(1971)年に三井側からの共同鉱業権により深部鉱脈の探索が提案されたことを契機として、これ以上の追加投資による収益が期待できないとして租鉱権設定が解除されている。

5 調査報告と保存状況・現況など

(1) 主な調査報告書には、以下のものがある。

① 『山ヶ野金山ー現地調査報告書ー』(霧島市教育委員会)2013

② 『鹿児島県霧島市横川町上ノ 山ヶ野金山作業場跡推定地発掘調査報告書』

(鹿児島大学法文学部比較考古学研究室)2011

この他、『金山水車(轟製錬所)跡』(鹿児島県立埋蔵文化財センター)2016がある。

①は、1. 坑跡、2. 石垣・門・石堀・石蔵、3. 石臼、4. 石塔類、5. 墓塔、6. 眼鏡橋、7. 山ヶ野野搗鉱所跡、水車小屋跡の総合的調査である。

1. 坑跡では(1)明治基幹坑跡、(2)自稼掘坑について調査されたが、江戸時代から大正14(1925)年廃止まで請負形態で行われた結果、「一体どれだけの坑道が掘られたのか計り知れない。江戸時代には、約千坑の坑道が掘られ、この内、継続的に採掘が行われたのは150坑であるという記録がある」としている。山ヶ野金山の主要鉱脈は42本とも36本とも言われ、この調査ではその一部に過ぎないこと、それでも「地割れ状の露天掘りを除く開口部を持つ坑跡だけに絞っても、その数は300基以上にもものぼる。見逃した坑跡も数多いと思われ、踏査範囲内だけでも実数はこの倍近い数になるかも知れない」と記す。史跡検討の場合、一括して全体を見るのであればよいが、坑道そのものが湧水等で入ることができないものも多く、また自稼掘坑そのものの正確な調査も進んでいない状況である。

2. 石垣に関しては、山ヶ野の地区内各所、集落内・山中を問わず、基本的には「野面積」で大小の自然石を乱積らんづみにしている。空積が大半で、練積ねりづみは一部の家の屋敷周りに用いられている。乱積の中には谷積や布積も混在して残されている。モルタルやコンクリートを接着剤として用いた練積は明治期以降のものと考えられる。現在、山ヶ野集落内の限られた地域内に残る石垣からは、住居がかつて多数建てられ賑わっていた状況を窺うことができる。

3. 石臼について、①では分布状況の把握に重点が行われて調査された。これに対して②では、詳細な調査観察が行われ、山ヶ野金山の臼の特徴として「自然の転石であろうと、母岩から切り出した石であろうと、形状にはこだわらず、側面も底面も形を整えることがない」ことが指摘さ

れた。

なお、②では、今後の課題として「露天掘りの跡や坑道跡を検出して、採鉱を具体的に明らかにすること、勝場跡の検出により、作業の詳細を明らかにすること、地方文書の探索と現在ある文書の解読を詳細に行うことにより金山経営の経済学的、社会的意義を明らかにすることである。いずれにしても、考古学と文献史学、民俗学を結集した学融合的な調査と研究が必要である。山ヶ野金山を含めて、薩摩藩の金山経営の全貌が明らかにされる日が来ることを期待する」と記している。

4. 墓塔の調査では、肥前・豊後・筑前の九州各地、石見・安芸・大坂・江戸の被葬者が確認されている。調査された 55 の墓塔中、最古は明暦 4（1658）年のもので、これらの中では元禄期（1688～1704）に建立されたものが最も多い（全体の 3 分の 1）。

(2) 保存状況・現状など

山ヶ野・永野金山そのものが長期間稼働した金山であり、江戸時代から昭和に至る金山関係遺構が数多く広域にわたって残されている。（金山周囲約 12 km が想定される。）

山ヶ野地区は、開山以来の金山奉行跡、番所跡、山ヶ野鉱業館跡、山師の邸宅跡（石垣や門構え）、晒坑跡、火入坑跡など明治基幹坑跡、無数の自稼掘坑跡がある。永野地区には、明治時代の近代化に伴い整備された鉱業館跡・三番滝製煉所跡や、坑内運搬された鉱石の搬出口である胡麻目坑跡、三番滝坑などの明治基幹坑跡、鉱石運搬用の鉄橋橋脚（平八重橋鉄橋）など、近代化遺産が中心である。ただし、坑道の考古学的発掘調査については殆どなされていないのが現状である。おびただしい数の坑道も、坑口が埋もれ、又は冠水していて調査が難しい箇所も多いが、今後の詳細調査が待たれる。また、胡麻目坑跡・三番滝坑跡・晒坑跡、火入坑跡などの坑口には、島津家の家紋が入った石組が残されている。これらは、金山の最盛期に撮影された古写真と併せて確認できるものが多く、当時の面影をよくとどめている。

尚古集成館には、山ヶ野金山が賑わっていた頃の古写真約 60 点が収蔵されている。12 代藩主であった島津忠義収集写真で 1870～80 年代、1897 年頃のアルバム、1911 年頃のアルバム、1925 年頃の絵葉書である。（薩摩興業株式会社山ヶ野金山鑛業所関係の絵葉書の数葉は歴史・美術センター黎明館も所蔵する。）

なお今回の範囲外ではあるが、始良市加治木町小山田の金山橋、霧島市溝辺町竹子の第三金山橋（上牟田橋）など、明治 10 年代の近代化の一環として架けられた石橋や、隼人町の水天淵発電所第一号・第二号水道トンネルなども関連遺構である。

地元の取組は、山ヶ野地区、永野地区とも積極的である。山ヶ野地区（霧島市）では、山ヶ野金山文化財保護活用実行委員会が結成され、パンフレット「山ヶ野金山史跡めぐり」をつくり、新型コロナウイルス感染症拡大前はウォーキング大会を開催（現在も再開）され、金山への認知度を高める取組をおこなっている。山ヶ野集落をはじめ、遺跡・遺構をめぐる場合には道路も未整備であり簡単ではない。今後の考古学的調査、景観維持（整備）は課題であろう。さつま町でもウォーキング大会を開催し、さつま町商工観光 PR 課によるパンフレット「永野（山ヶ野）金山産業遺跡群」を作成し、平成 22 年度（2010～11）県北薩地域振興局の補助により主な遺跡・遺構の説明板などの整備も行っている。

6 まとめ—今後の研究課題、指定に向けた検討課題など

(1) 当該史跡の範囲・調査状況・地域生活文化、環境との関わり

・山ヶ野金山・永野金山跡は広範囲にわたる地域である。その中で金山関係の遺構は、近世のもの、近代以降の近代化事業に関わるものがある。また、藩の経営・支配に関わるもの、近代の島津家・薩摩興業の経営による基幹坑などに対して、江戸時代以来の自稼請負制で掘られた坑道など無数の遺構・遺物が存在する。

・薩摩藩の経済社会史を考える上で重要な遺跡である。また、近代化を物語る遺跡としても整備し保存活用されることが望まれる。

・坑道や作業場跡などは、考古学的調査が十分なされていないため、今後の計画的調査が必要である。

・鉱山史を考える場合の、鉱山廃水や森林の伐採の問題（対応）を踏まえて、今後の地域活動にも生かせないか（景観維持など）。

(2) 指定範囲・対象

・広域での指定は、所有関係の課題も多い。当初は、近代化に関わる遺構を中心に検討か。

・例えば、比較的指定しやすいのは、近代化事業に伴い開削された坑道「明治基幹九坑」、残された橋脚、施設跡である。

〔明治基幹九坑〕

・山ヶ野金山：晒坑、夢想谷坑、火入坑、とじ山坑、千石坑

・永野金山：三番滝坑、胡麻目坑、大高坑、小高坑

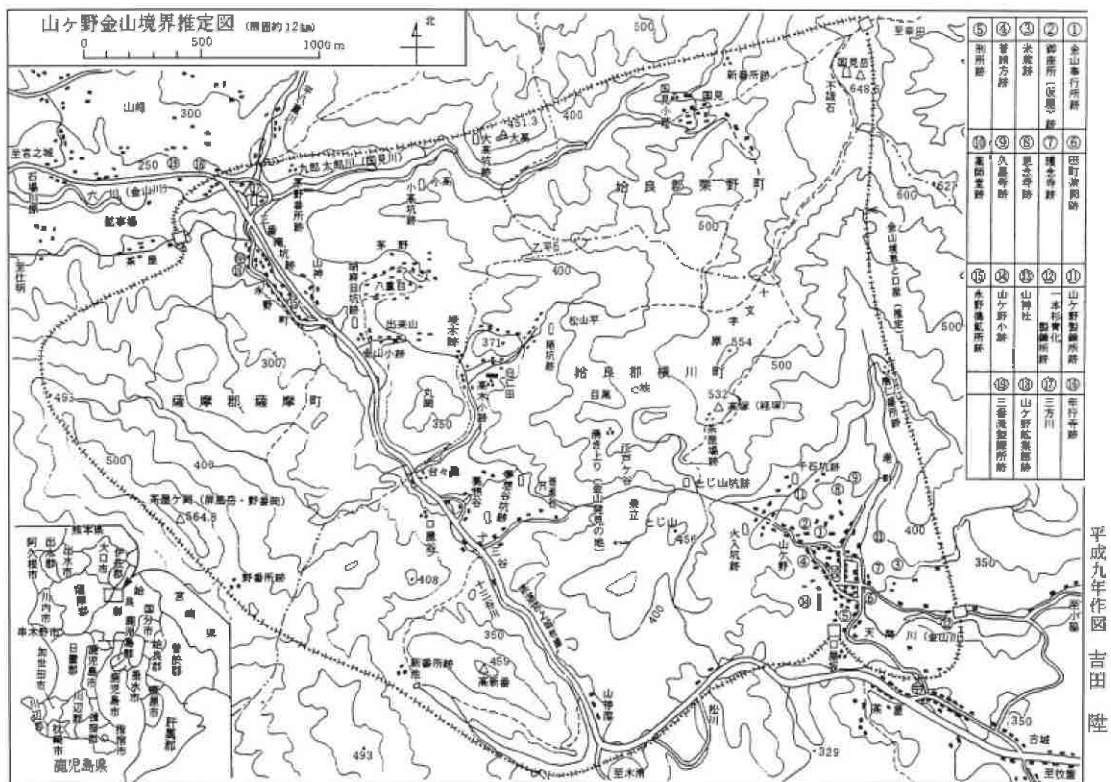


図 山ヶ野金山境界推定図 (引用：黄金の郷 永野金山歴史調査報告書 P16)

参考文献

- 福元啓介(2021)「嘉永・安政期における薩摩藩の鉱山利用 島津斉彬と山ヶ野金山・谷山錫山」『尚古集成館研究紀要 第20号』尚古集成館
- 新田英治(2018)「鹿児島県の金山と鉱業」『大学的鹿児島ガイドーこだわりの歩き方』鹿児島大学法文学部、昭和堂
- (2018)『神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター研究成果報告書 日本近世生活 絵引〔南九州編〕』神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター
- (2013)『山ヶ野金山ー現地調査報告書ー』霧島市教育委員会
- 新田英治(2013)「山ヶ野金山初代山先役・内山予右衛門とその墓碑」『鹿児島史学 第60号』鹿児島大学法文学部
- (2011)『黄金の郷 永野金山歴史調査報告書』さつま町教育委員会・永野金山歴史調査実行委員会
- (2013)『西郷菊次郎と永野金山 西郷菊次郎鉱業館長就任百周年記念誌』永野西郷菊次郎顕彰会
- (2011)『鹿児島県霧島市横川町上ノ 山ヶ野金山作業場跡推定地発掘調査報告書』鹿児島大学法文学部比較考古学研究室
- 新田英治(2009)「山ヶ野金山の開山事情と鉱山技術」『南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集 下巻』南九州縄文文化研究会
- 吉田陞(2008)『続・山ヶ野金山物語』高城書房
- (2004)『鹿児島県の近代化遺産 鹿児島県近代化遺産総合調査報告書』鹿児島県教育委員会
- (2003)『図録 薩摩のモノづくり 島津斉彬の集成館事業』尚古集成館
- (1988)「薩摩町、長野村」の項『日本歴史地名体系第47巻 鹿児島県の地名』平凡社
- (1998)『薩摩町郷土史』薩摩町
- 吉田陞(1997)『山ヶ野金山物語』高城書房
- 寺尾美保(1996)「明治十年代の島津家の家政運営と財政事情 鉱山近代化をめぐる島津家と明治政府」『尚古集成館紀要 第8号』尚古集成館
- 松尾千歳・浦島幸世(1995)「山ヶ野金山」『地質ニュース』489号 地質調査所
- 浦島幸世(1993)『金山』春苑堂出版
- (1992)『株式会社島津興業設立百年史』株式会社島津興業
- 石川哲(1990)『山ヶ野金山のすべて』高城書房
- (1962)『株式会社島津興業40年史』株式会社島津興業
- 日本学士院日本科学史刊行会(1958)『明治前日本鉱業技術発達史』井上書店・臨川書店(1982復刻版)
- (1967)『鹿児島県史 第五巻』鹿児島県
- (1943)『同 第四巻』鹿児島県(1967復刻版)
- (1940)『同 第二巻』鹿児島県(1967復刻版)

参考史料集・史料等

- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編(2004)『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集一』
鹿児島県歴史資料センター黎明館編(2005)『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集二』
鹿児島県歴史資料センター黎明館編(2007)『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集四』
鹿児島県歴史資料センター黎明館編(2010)『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集六』
鹿児島県歴史資料センター黎明館編(2018)『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 地誌備考五』
鹿児島県維新史料編さん所編(1971)『鹿児島県史料 旧記雑録追録一』
(1959)『鹿児島県史料集 第1集 薩藩政要録』鹿児島県立図書館
(1984)「年代記」『鹿児島県史料集 第25集 三州御治世要覧』所収 鹿児島県立図書館
(1988)「薩藩政要録」『鹿児島県史料集 第29集 要用集(下)』所収 鹿児島県立図書館
(2013)「監察使答問抄上下」『鹿児島県史料集第 52集 通昭録(一)』所収 鹿児島県立図書館
(1982)『三国名勝図会 卷二』佐志郷(復刻版) 青潮社
(1982)『同 卷三』横川郷(復刻版) 青潮社
(1971)『薩隅日地理纂考』鹿児島県地方史学会
(1971)「西藩野史」『新薩藩叢書 二』所収 歴史図書社
(1971)「称名墓誌」『同 三』所収 歴史図書社
(1971)「古記」『鹿児島市史 III』鹿児島市

「鉾山万留 乾・坤」(鹿児島県立図書館)

「金山境内(寛政十一年三月二十一日山ヶ野金山境内山奉行立会見分被仰渡、山奉行最上孫左衛門より申出趣有之、吟味被仰渡再々申上候一卷留の写)」(鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵)

「天保九年戊六月吉日 金山ニ而御答可申上太概」(鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵)

「山ヶ野金山御取建之由緒(享和3(1803)年記載、弘化4(1847)年追記)」(鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵)

「杉白木箱 山ヶ野鉾山ニ係ル書類」(鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵玉里文庫)

「山ヶ野金山状況報告」「山ヶ野金山会計報告」「山ヶ野金山関係書類」(鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵玉里文庫)

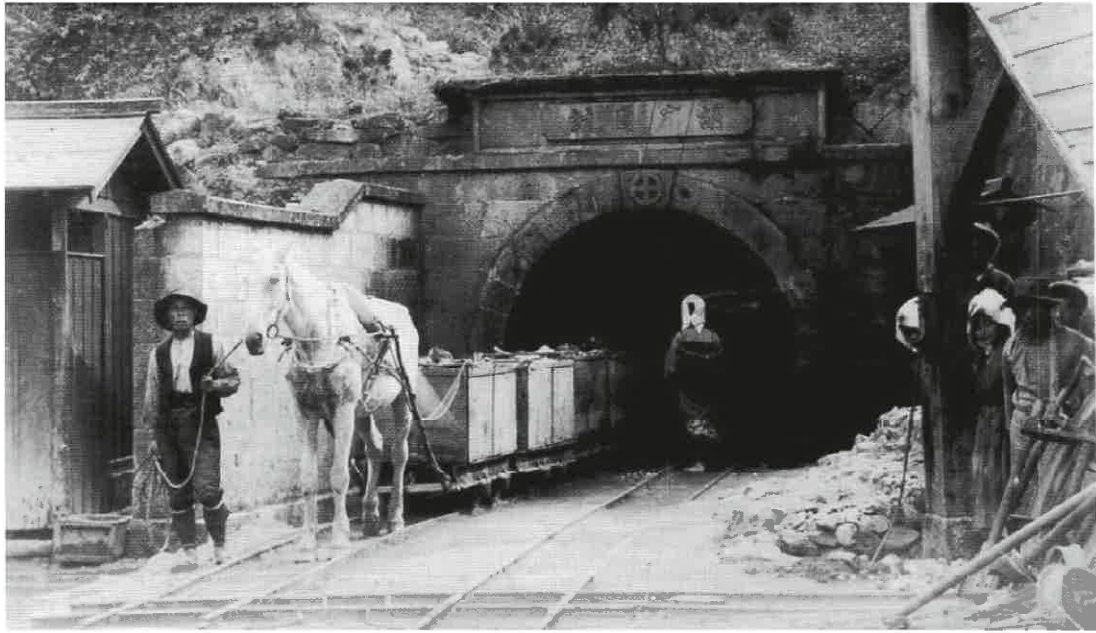
「山ヶ野金山御利潤総」(東京大学史料編纂所像島津家本 さII-12-6-18)

「山ヶ野金山本払総」(東京大学史料編纂所像島津家本 さII-12-6-34)

「諸組御蔵入免本米並験地高出来米等本総」(東京大学史料編纂所像島津家本 さII-12-6-43)

「諸組御蔵入免本銀並諸上納金本払総」(東京大学史料編纂所像島津家本 さII-12-6-59)

「諸組免本給地高出来諸郷蔵々軒数等取調帳」(東京大学史料編纂所像島津家文書 81-2-117)



胡麻目坑



火入坑

1 はじめに

金山水車（轟精錬所）跡は、南九州市知覧町郡に所在し、明治期から昭和初期にかけて、麓川の豊富な水力を用い、水車動力により金鉱石の粉碎と精錬を行った遺跡である。明治 37(1904)年から昭和 10(1935)年まで稼働した精錬所で、当初は銀鉱を樽混汞法で精錬したが、後に赤石鉱山の金鉱を湿式搗鉱で精錬するようになったとされる。

平成 26 年に行われた主要地方道穎娃川辺線（知覧道路）の建設に伴う発掘調査で、導水路と水車坑、これに伴う建屋、石垣、道跡等の遺構が良好な状態で発見され、平成 29 年 4 月 21 日に鹿児島県指定文化財（史跡）に指定された。

今回調査を行ったのは、精錬所より約 300m 下流にある水力発電所跡である。

2 水力発電所跡について

水力発電所跡は、赤石鉱山と轟精錬所跡に送電するための自家発電施設として設置されたもので、大正 10(1921)年に設置申請を行って送電工事が始まり、大正 13(1924)に赤石鉱山への送電を開始した。

設備は、轟精錬所から 50m 下流で石堤及び導水路を築き、阿多熔結凝灰岩の岩盤に約 300m の隧道を掘り、銅製導水管で落水させタービンを稼働させたという（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2016）。

平成 30 年度には、南九州市教育員会により発電所跡の遺構や現存する発電機の清掃調査を実施し、金山水車跡全体の基準点測量委託が行われた。また令和元年度には発電機の三次元測量調査が実施され、令和 3 年にこれらの追加調査の報告書が刊行された（南九州市教育委員会 2021）。

南九州市教育委員会が実施した追加調査の結果、発電所建屋の痕跡と発電機の残存状況が明らかとなり、麓川右岸には発電所跡の石垣とタービンに後続すると考えられる排水溝が現存していることが確認された。

なお、発電機は「電業社原動機製造所製」渦巻き型タービンである。

3 現地調査

令和 4 年 11 月 21 日に、南九州市教育員会が実施した追加調査の成果と、現地の残存状況を確認するための現地調査を実施した。現地調査では、追加調査によって明らかになった発電所遺構が良好に残存することを確認したが、周辺の踏査で、建物跡上方斜面に築かれた導水管に接続する集水枡の残存を確認したため、令和 5 年 1 月 10 日に、県教育庁文化財課職員と南九州市文化財課職員で追加の分布調査と取り扱い協議を実施した。

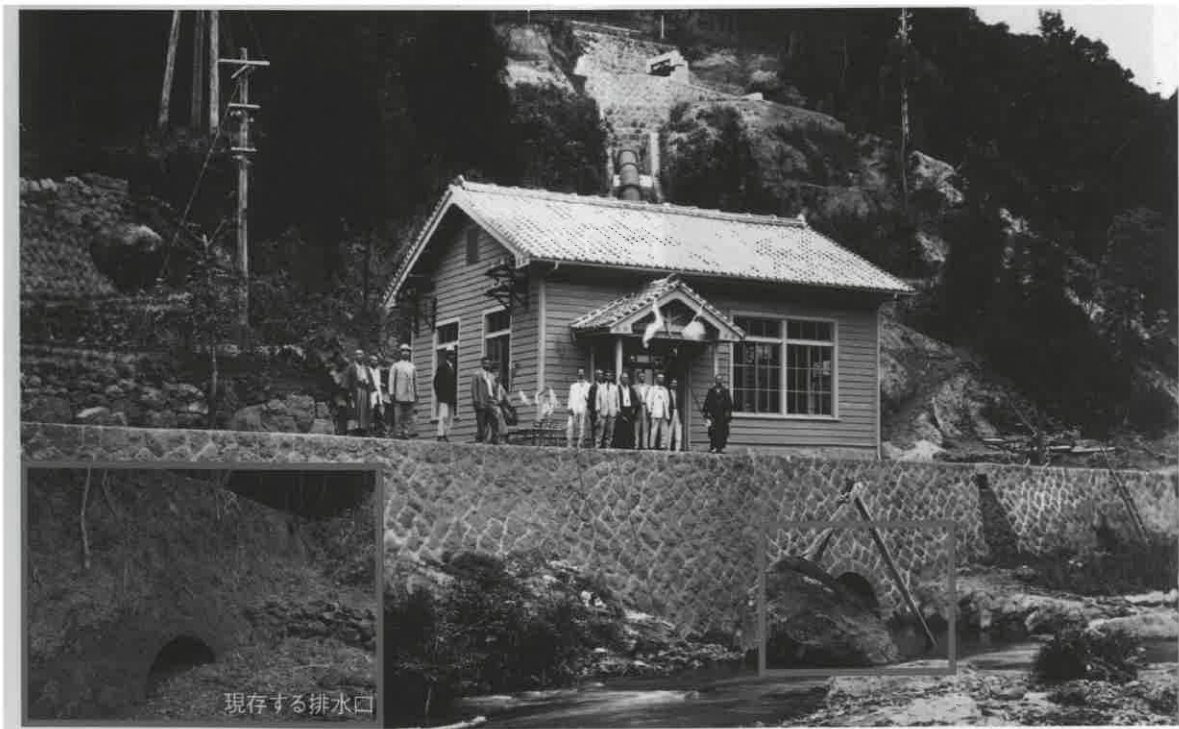
この追加分布調査の結果、発電所跡の遺構として確認された発電所の建屋跡と落水のための導水管、発電機、排水口のほか、精錬所跡の下流 50m 付近に築かれた石堤から導水管に至る取水口、導水路（隧道含む）、放水路、これらの流水を制御するための枡などが良好に残存することが確認された。

4 まとめ

現地調査の結果、轟精錬所跡の下流に設置された発電所跡は、南九州市教育員会により実施された追加調査により明らかになった発電所の建屋跡と落水のための導水管、発電機、排水口が確認されたが、建屋の上斜面には、未確認の遺構が残されており追加調査が必要である。知覧町郷土史（知覧町 2002）に掲載された「水路予測平面図」には、麓川取水口から発電所跡に至る導水施設が描かれており、ミュージアム知覧に寄託された「宮内家文書」を含めて、さらに調査を行うことが必要である。



金山水車（轟精錬所）下流発電所跡発電機



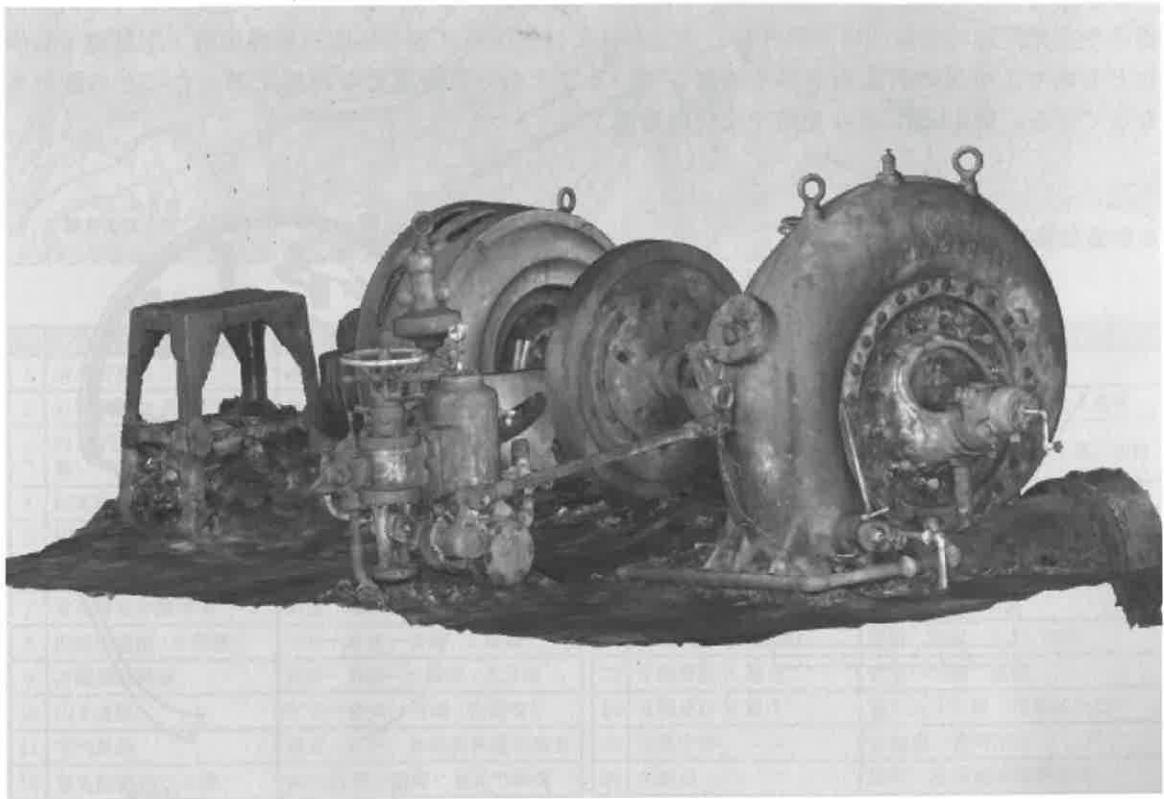
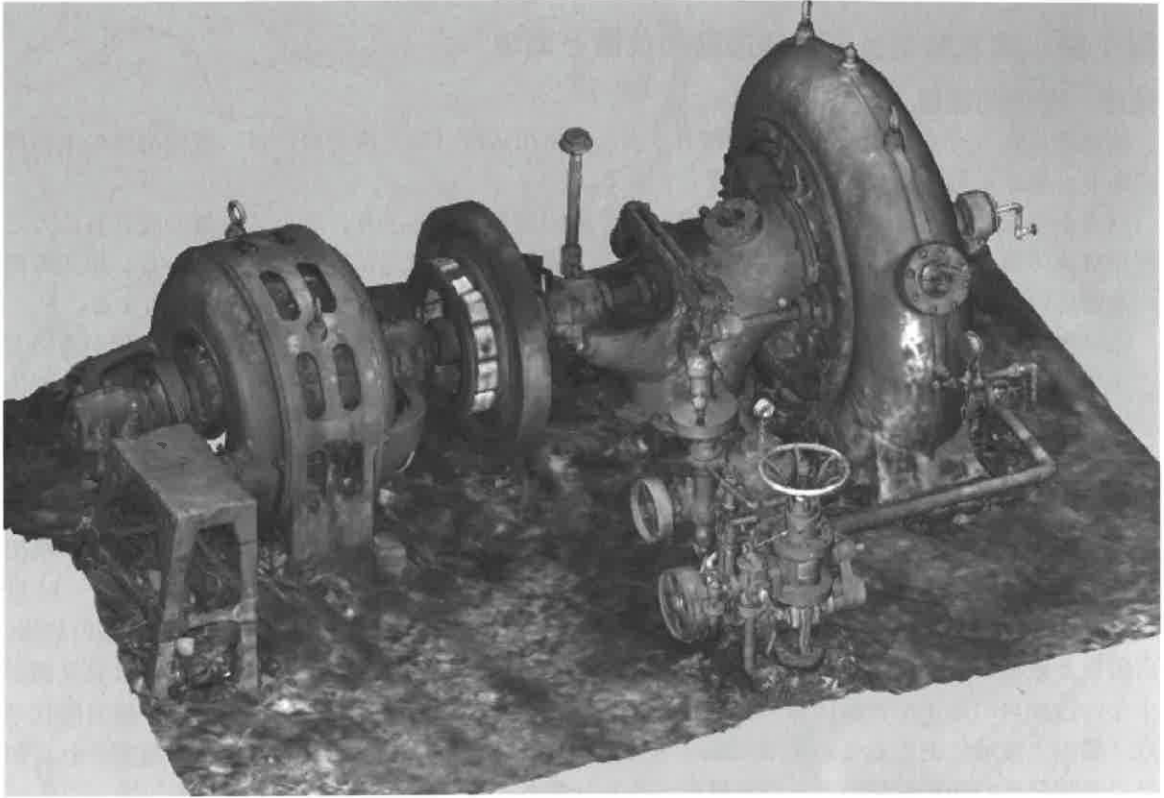
金山水車（轟精錬所）下流発電所古写真（宮内家文書）と排水口



発電機



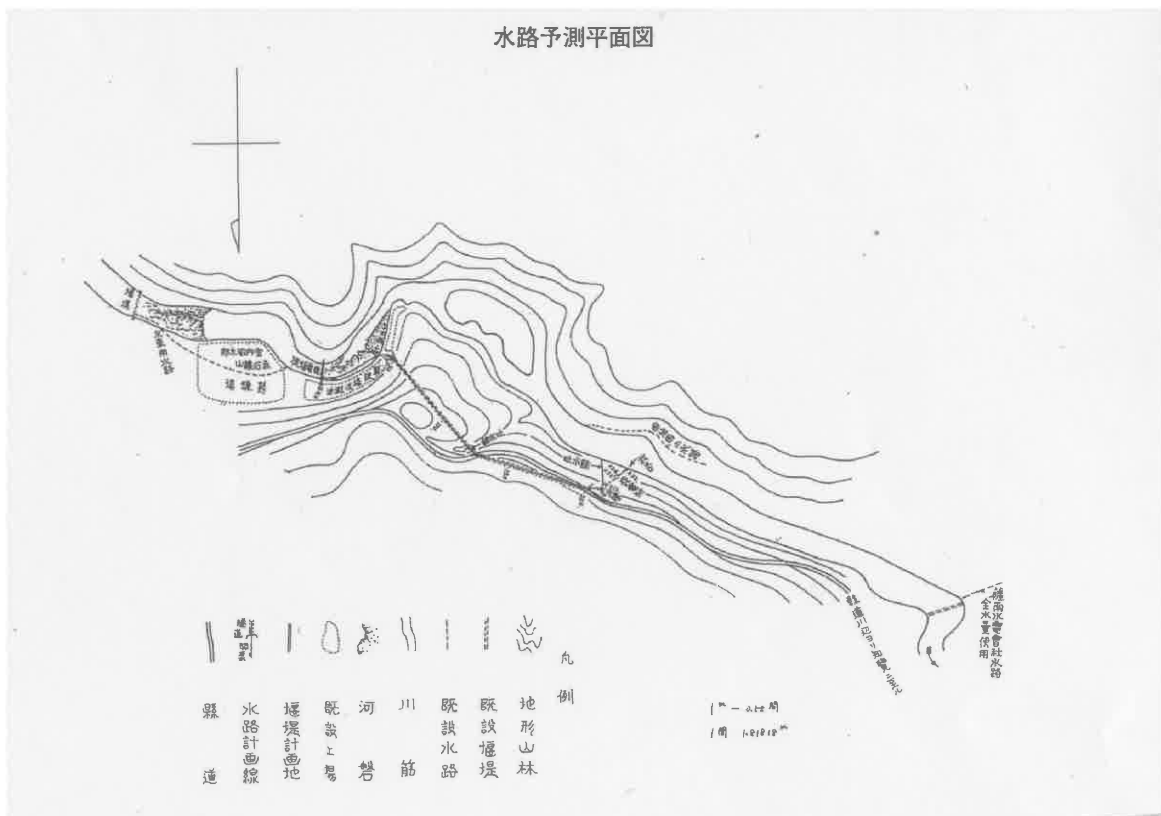
排水口



金山水車（轟精錬所）下流発電所跡発電機の三次元実測図



金山水車（轟精錬所）下流発電所跡上斜面に確認された導水遺構



水路予測平面図（宮内家文書）『知覧町郷土史』より抜粋

ひおきしふきあげちょう おおなむちじんじゃ せんぼんぐす しゃそう
日置市吹上町の大汝牟遅神社の「千本楠」社叢

県文化財保護審議会委員 鈴木 英治

1 はじめに

日置市吹上町中原東宮内の大汝牟遅(おおなむち)神社の参道東側に同神社の所有地で「千本楠」と呼ばれるクスノキの巨木が十数本茂る約 50m×100m の区画がある(図1)。昭和40年1月22日には日置市(旧吹上町)の天然記念物として指定告示されている。クスノキは日本では最も巨木が多い樹種であり、著名な蒲生の大楠のほか、巨大なクスノキは各地で見られる。しかし1ヶ所に十数本の古い大楠が集中しているのは珍しい。また、地を這(は)うように横へ伸びる巨大な枝が多いことも特徴的である。

日置市の資料によると、大汝牟遅神社は、日置市吹上町中原にある吹上地域で最も大きな神社で、大己貴命(おおなむちのみこと)・仲哀天皇他6柱を祭神とする。社伝では、鎌倉の鶴岡八幡宮を勧請したとされるほか、三輪明神(奈良県桜井市大神(おおみわ)神社)を勧請したとの伝承もある。当社の創建期は不明だが、『三国名勝図会』(天保14(1843)年編)には、当社に文安元年(1444)以来の棟札があると記されている。毎年11月23日に流鏝馬(やぶさめ)が奉納されることで知られる。

伝説によると、大汝牟遅神社の祭神の大汝牟遅命(おおなむちのみこと)が当地に来られたときに、楠の杖(つえ)を地面に刺したところ、これが根づいて親木になったとされている。その親木は幹の周りが18m余りもある大木であったが、風も無い夜に大音響とともに倒れたと伝えられている。朽ちた根元の一部が以前残っていて、かつての大きさを偲ばせていたが、現在は完全に朽ち果て、その痕跡を見ることはできない。

明治43(1910)年の日英博覧会に出品した楠の切株を調べたところ、樹齢800年以上と推定されたとされる。

江戸後期、薩摩藩と大坂銀主による同藩産紙の大坂出荷の企図に参画し、6度にわたり大坂・鹿児島間を往復していた大阪商人の高木善助は、文政12年(1829)2月19日に当地を訪れ、「希代の楠」として、楠が四方に枝葉を伸ばす様を「実に類いなき事なり」「誠に此の楠は見ものなり」と評し(鹿児島県立図書館蔵「薩隅日三州経歴之記事」、その姿を「大汝八幡宮大楠之図」として描いている(同館蔵「紀行篇画帖」)。

また、詩人 野口雨情(英吉1882-1945)は、この光景をみて、「伊作八幡千本楠は 横へ横へと寝てのびる」と歌っている。

2 千本楠の状態

図1の位置図のように千本楠は日置市吹上町中原東宮内大汝牟遅神社から約100m南の緯度31.513064N、経度130.351013Eの位置にあり、南北に約50m、東西に約100mの範囲に生育する約20本の巨木である。「千本楠」という名称で呼ばれているが数多くのクスノキが生育しているのではなく、その名称の由来は不明である。鹿児島県ではかつて多くのクスノキが栽培されていたので、この地域にも多数のクスノキがあったのかもしれない。



図1 千本楠の位置

表1に千本楠の範囲に生えていた樹木の胸高直径、図2にその位置、図3には数本の樹木の写真を示す。この区域に22本の大木があったが、2本はタブノキであり、20本がクスノキであった。胸高直径は8cmから253cmであった。幹周囲が300cm以上、直径では95cm以上の樹木を環境省では巨樹・巨木と定義しているが、その基準を満たすものは20本であった。

なお老木なので幹にフウトウカズラなどの植物が着生していることが多かったが、神域で保護されている樹木なので着生植物を取り除くことはせずに、その上から直径を測ったので、数cmは過大評価されている樹木もあった。また老木であり、瘤や根張があり胸高130cmの位置の幹が円形から大きくずれていることもあったが、なるべく円に近い断面で直径を測るように、測定的位置はずらした。それらの事情を考慮しても、20本は環境省の巨樹・巨木に入るであろう。

このような巨木が0.5haほどの範囲に生育していることは珍しく、県の天然記念物に指定するにふさわしい樹木群と考える。

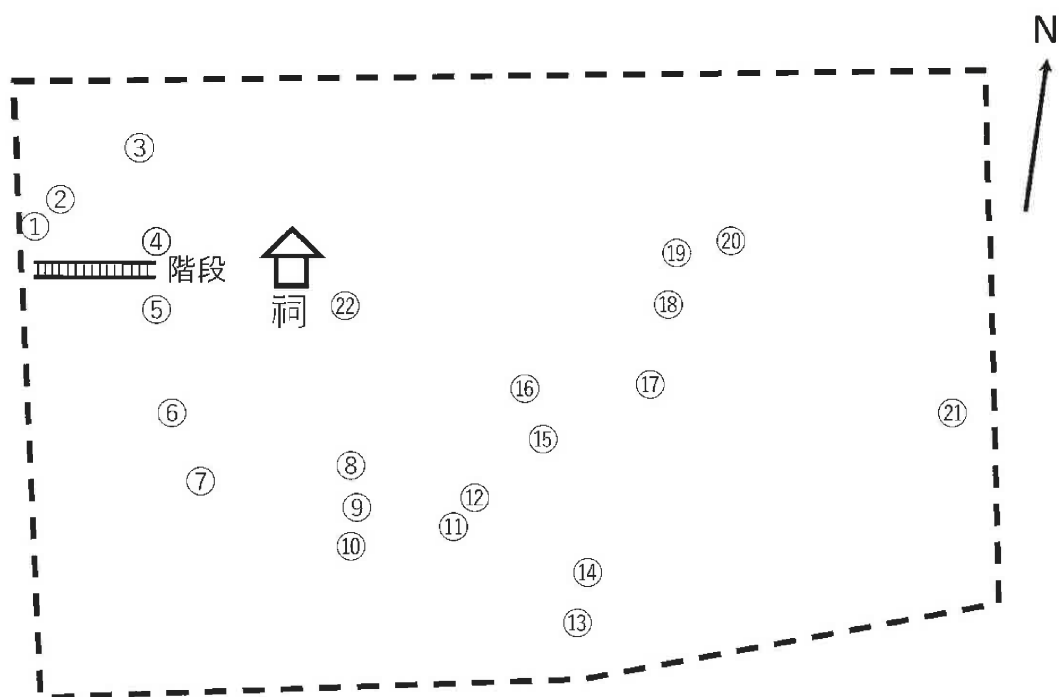


図2 千本楠の位置図 番号は表1の番号と同じ

表1 千本楠の胸高直径 3番と14番はタブノキ、その他はクスノキ

番号	直径 (cm)	備考	番号	直径 (cm)	備考
1	81		12	127	
2	58		13	253	二又分岐
3	107	タブノキ	14	106	タブノキ (空洞)
4	153		15	171	
5	168		16	121	
6	172		17	250	
7	113		18	232	
8	207		19	172	
9	117	9と10は同株	20	162	
10	123	9と10は同株	21	122	
11	148		22	99	

注：幹に草本が付着していることがあったが、それらを剥がさずに直径を測っているため、数cm過大評価されていることがある。胸高の高さは地面から130cm上を原則としたが、瘤や根張を避けるために測定高を変えたことがある。



図3 千本楠の中 右から枯死木、表1の⑰、⑱、㉑の木

参考文献・引用文献

- 高木善助著・東條広光編(2016)『薩陽紀行 大坂商人の旅日記 文政・天保期の南九州への旅』
鹿児島学術文化出版
- (1966)『ふきあげ 10年のあゆみ』吹上町
- (1966)『吹上郷土史』上巻 吹上町教育委員会
- (1969)『吹上郷土史』中巻 吹上町教育委員会
- (1974)『吹上郷土史』下巻 吹上町教育委員会
- (1979)『吹上郷土史』現代編 吹上町教育委員会
- (1985)『吹上町の文化財と神話・伝説』吹上町教育委員会
- (2003)『吹上郷土誌』通史編1・3・資料編 吹上町教育委員会

たちきり よこみね
立切遺跡・横峯遺跡

1 所在地

熊毛郡中種子町大字坂井字今平 2876 番地外 31 筆等

熊毛郡南種子町島間字横峯 2510 番地 28

2 指定年月日

令和 4 年 11 月 10 日指定

3 特徴

立切遺跡は、種子島中部の標高 120m の台地上に立地する。発掘調査によって、後期旧石器時代前半期の落とし穴遺構 24 基、礫群 5 基、焼土跡 12 基、炭化物集中 3 か所等が確認された。落とし穴遺構はいずれも種IV火山灰層（約 3 万 5 千年前）下位で検出され、断面はフラスコ形と筒形で、上端開口部はいずれもラッパ状に開く特徴を持つ。礫群には明確な焼土や炭化物が見られる。出土遺物は磨石や局部磨製石斧等の礫石器が主体である。

横峯遺跡は、種子島南部の標高 120m の台地上に立地する。発掘調査では、立切遺跡同様に後期旧石器時代前半期の礫群 9 基と炭化物集中 10 か所等が検出され、礫群には明確な掘り込みを持つものがある。石器は台石や磨石のほか、削器等の剥片石器も認められる。

両遺跡は文化層の年代や変遷が共通する。さらに、両遺跡における植物質食料加工具の卓越や伐採具の存在は照葉樹林を主体とする森林環境への適応を示しており、立切遺跡の遺構は生業のあり方を、横峯遺跡の遺構は居住のあり方をよく示している。これらが古本州の南端でいち早く出現した点は、旧石器時代の現生人類の環境への適応過程を理解する上で重要である。



立切遺跡の落とし穴（県立埋文センター提供）



横峯遺跡の礫群（南種子町教育委員会提供）

種子島^{たねがしま}国上^{くにがみ}湊川^{みなとがわ}・阿嶽川^{あだけがわ}のマングローブ林^{りん}

1 所在地

鹿児島県西之表市国上 1308 番地 10 外 3 筆
熊毛郡中種子町大字坂井池之角

2 指定年月日

平成 27 年 10 月 7 日指定、令和 4 年 11 月 10 日追加指定

3 特徴

マングローブ林は熱帯から亜熱帯の汽水域に分布する森林で、特異な形態と生活様式をもった植物群落である。マングローブ林は熱帯・亜熱帯の暖かい地域に分布し、日本では鹿児島県と沖縄県の一部の汽水域に分布しており、アジア地域における自然分布の北限は種子島といわれている。マングローブ林を構成する樹木は世界で 100 種程度あるが、日本では 5 種である。北限域となる種子島では、低温耐性の強いメヒルギのみが島の東側に位置する 6 河川で生育する。マングローブ林の高さは河川の中央部に近い部分では低く 1～1.5m 程度、辺縁部は 4 m 前後である。地形的に 低く周辺から強風が当たる地域では、メヒルギの伸長生長が悪く、1 個体の占める面積を広げる独特の樹形を呈している。その中で、阿嶽川のマングローブ林は生育面積も比較的広く、良好な生育環境が残されている。北限域で、独特の樹形を呈するマングローブ林が良好に残されている地域として価値が高い。

今回、種子島の北部にある湊川の群落を追加指定し、名称を「種子島阿嶽川のマングローブ林」から「種子島国上湊川・阿嶽川のマングローブ林」に変更する。



川沿いのマングローブ林（湊川）（西之表市教育委員会提供）

1 登録有形文化財（建造物）

さんしょうがっこうこうしゃ 山小学校校舎

（令4.10.31登録）

所在地：大島郡徳之島町山字兼久田 1808-イ

建築構造：鉄筋コンクリート造2階建

建築規模：面積 334 m²

建築年代：昭和30年／同44年増築

登録基準：国土の歴史的景観に寄与しているもの

徳之島北東部に所在する校舎。鉄筋コンクリート造2階建、各階北側に教室を2室並べ、南側は開放廊下とし、西端に階段室を付している。後年更に西側に各階1室増築。平面等が琉球列島アメリカ民政府工務交通局の2階建4教室標準設計に共通しており、正面の開放廊下が印象的な校舎。



（徳之島町教育委員会提供）